



野球選手

TAKESHITA AKIHIRO

竹下 瑛広 (22・山梨出身)

気持ちの強さをプロの世界でも

小学3年生の頃にソフトボールを始め竹下さん。中学で野球部に入り、練習に打ち込んだ。上達してできることが増えるのが楽しく、夢中で野球を遊んだ。高校は、地元厚木高校に入学。1年生の秋に、監督の勧めで投手から投手に転向した。始めた頃は、球速は遅く、制球も定まらなかった。他の選手に遅れを感じていた竹下さんは、全体練習に加えて自宅でも投球フォームの確認や体幹トレーニングなどを重ねた。それでも、チームで一番の投手にはなれなかった。夏の予選大会後、進学先を悩む竹下さんに監督は「焦

プロフィール

2000年生まれ。北小・藤塚中学校出身。厚木北高校卒業後、函館大学に進学。長身から投げ下ろす投球スタイルで最速148km/hの速球を投げ込む投手。22年に育成ドラフト3位で東北楽天ゴールデンイーグルスに入団。厚木北高校初のプロ野球選手。

10

月20日、函館大学。野球部は、固唾をのんでその瞬間を待っていた。「プロになれば覚悟で望んだ、2022年プロ野球ドラフト会議。「東北楽天ゴールデンイーグルス、竹下瑛広。」テレビから自分の名前が聞こえた瞬間、椅子から自然と飛び上がった。竹下さんは11月、育成選手としてプロの球団に入団した。

「名前が呼ばれるかドキドキだった」とドラフト会議当日を振り返る竹下さん。指名に、チームメイトからは手厚い祝福を受け、両親は涙を流して喜んでくれた。「緊張する試合展開やピッチの場面ほど息が合っている」と力を入れる竹下さん。前向きで強い気持ちで武器に、プロの世界へと立ち向かっていく。



指名後に仲間から祝福を受ける竹下さん(中)



久保寺 真仁 (22・毛利台出身)

千葉工业大学 未来ロボティクス学科 KUBOTERA MASATO

物作りを始めるきっかけに

頭

部が組み込まれたカメラがサッカーボールを認識し、自動でゴール目掛けて蹴り進んでいく。接触して倒れても起き上がり、まるで人間のように全身でバランスをとりながらシュートを放つ。4体のロボット同士が勝敗を競う「ヒューマノイドサッカー」。昨年7月、タイで開かれた世界大会で、千葉工业大学のチームが優勝を果たした。ロボット本体の設計を担った久保寺さんは「小学校の卒業文集に書いた夢が、やっと

かなりました」と、はにかんだ。久保寺さんがロボット作りに出会ったのは10歳の時。プロトタイプ玩具での物作りに没頭し、次第にモーターなどを取り付けて動かすようになっていった。「頭の中のイメージを形にするのが楽しくて、作っては壊しを繰り返していった」と振り返る。小学5年から高校生までは自作ロボットの大会で好成績を残し「より人間に近い物を作りたい」と今の大学に進んだ。これまで、製作をほとんど一人で手掛けてきた久保寺さん。大学に入り、知識や技術が異なるメンバー同士の意思疎通や開発の資金繰りなど、戸惑うことも多かった。しかし、目を重ねることに、自分の苦手な分野やできないことを支えてくれる仲間がいて、やりがいを感じるようになった。コロナ禍で3年ぶりに開催された昨年世界大会。ロボット本体を作るリーダーを務めた久保寺さんは、24



世界大会の決勝で対戦したフランスチームと

厚木から羽ばたく

熱気人

ATSUGIBITO

この地で生まれ育ち、夢に向かってひたむきに努力を重ねる「熱気人」たち。個性や特長を生かし、自分の信じた道を明るい未来へと歩み続ける。

◎広報課 ☎225-2040

映画監督

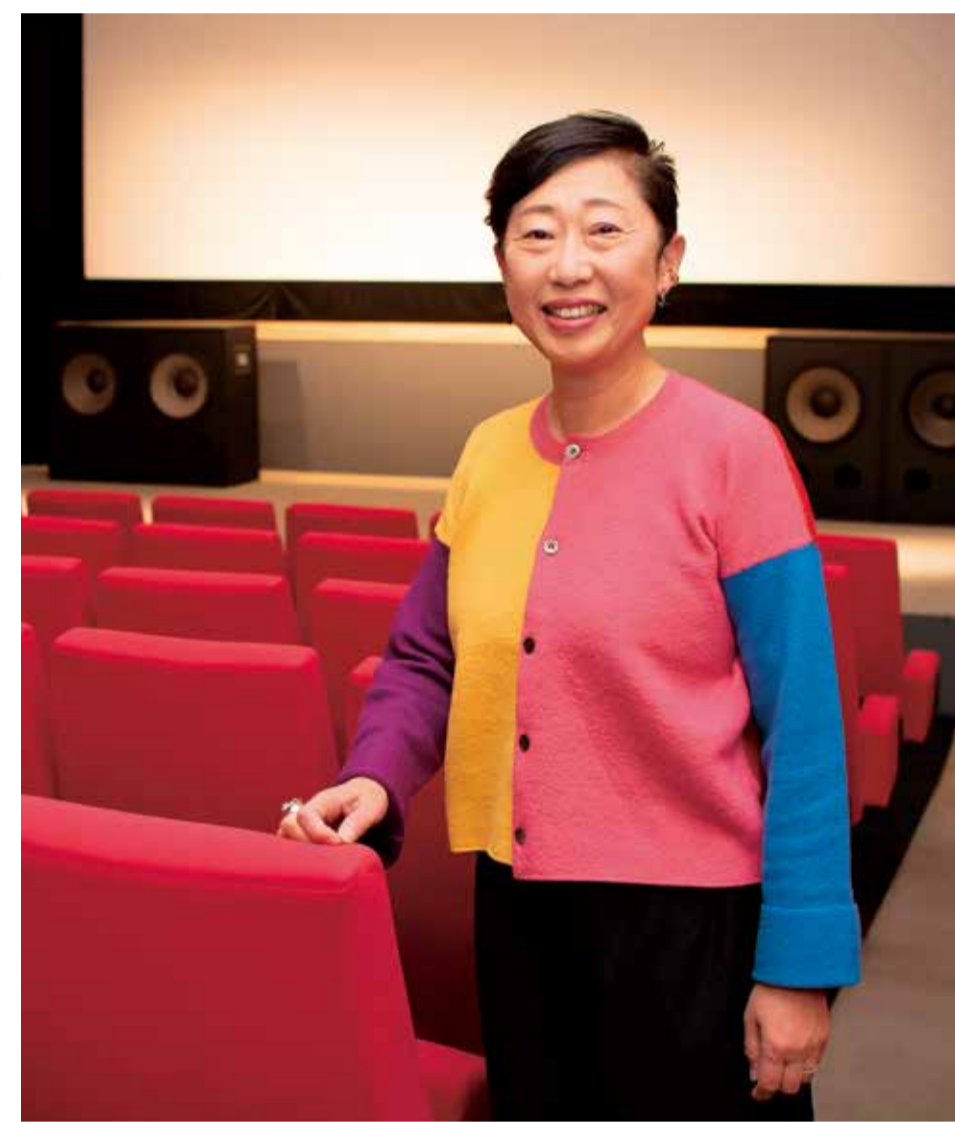
MATSUMOTO TAKAKO

松本 貴子 (62・恩名)

世界的な芸術家に縄文遺跡の発掘調査員、スーパーモデル、農家のおばあちゃん。松本さんが手掛けた映像作品の題材は、一見、共通点がないように見える。「全部、自分がこの人だ!」と思った人々。興味がないとうまく形にできない」と苦笑する。

市内で生まれ育った松本さんは小学生の頃、登下校の途中で田んぼのカエルの卵を観察したり、林でへびを捕まえたりと、自然で遊ぶのが大好きだった。体を動かすのが得意で中学・高校は運動部に入ったが、あまり熱中できないまま卒業。映像に興味を持ったのは大学生の時、

すてきな人への興味を追究したい



プロフィール

1960年生まれ。南毛利小・中学校出身。大学時代に監督した自主映画がびあフィルムフェスティバルで入選。映像制作会社、フリーランスを経て2017年にびけプロダクションを設立し、主にドキュメンタリー番組を制作。草間彌生に密着取材ができる唯一の監督として、テレビ番組、映画、展示映像などを手掛ける。



「体的にはきつい仕事だけど、水が合う」と話す

「取材は予定通りいかないし、いつも先が見えないまま撮っている。ハプニングを楽しみながら、どう対処するかが面白い」と話す松本さん。「ゴールを決めずに進み続けるのは、草間さんの影響かも」とほほ笑む。次はどんなわくわくするものに出会うのか、今日も胸を高鳴らせている。

「自分は人に興味があったのか」と気付いた。世界的な芸術家・草間彌生さんに出会ったのは、番組で芸術家を取り上げた1995年のことだった。当時は、海外では評価されていたものの、日本での知名度は今ほどではなかった。「初めて会った瞬間、「この人、すてき!面白い!」と興味を湧いた」。草間さんが描いた富士



2015年「草間彌生 わたしの富士山～浮世絵版画への挑戦～」(NHK BSプレミアム) ロケ後に。取材では「集中できない」と何度も出入り禁止になったが、チャンスをつかみ続けた。「常に上を目指し続ける本物の天才」とほほ笑む

何となく入った映画研究会がきっかけだった。それまで自分の考えを形にすることがなかった松本さん。シナリオを書くことで自分の興味や考えが分かること、共鳴して誰かが一緒にものづくりをしてくれること、それらが形になっていく面白さに夢中になった。卒業後は、映像制作会社に入社した。「厚木から1週間分の着替えを持って、都内の会社で寝泊まりする生活。きついくてすごく楽しかった」と振り返る。テレビ番組のディレクターとして最初に担当したファッション番組では、最先端のおしゃれの紹介よりもデザインナーに焦点を当てた企画が面白

プロフィール 2000年生まれ。毛利台小・小・中学で優勝たを手に、教育委員会表彰に自ら手がけた。口はオープンで、イラストも描ける。 ▶

